広島の女性作家・岡田（永代）美知代研究（2）

―著作の概要―

有元伸子

【キーワード】岡田（永代）美知代、著作リスト、田山花袋、少女小説

はじめに

岡田（永代）美知代（一八八五年（明治一八）～一九六八年（昭和四三））は、広島県甲奴郡上下村（現・府中市上下町）出身の女性作家である。明治末から大正期にかけて、小説や数多くの少女小説を執筆した。英語に堪能で、ストウ夫人の「アンクル・トムズ・ケビン」を『奴隷トム』（一九二三年（大正一二）、成文堂）のタイトルで翻訳刊行もしている。しかしながら、美知代の名は当初から田山花袋の「蒲団」や「縁」に登場する女弟子のモデルとしてささやかれ、美知代自身の業績にはなかなか日の目があたらなかった。

もちろん、従来も美知代へのアプローチはなされている。とくに花袋研究は蓄積も厚く、美知代に関する重要な資料も紹介されてきた。また、近年、美知代作品を読む機運も高まってきたようにも思える。まず、美知代の生家は、二〇〇三年に上下町歴史文化資料館として開館し（市町村合併により、現在は府中市上下歴史文化資料館）、未発表原稿などの資料保存を行なうとともに、展示や企画などにより美知代文学の普及をはかっている。さらに本年（二〇一一年）に刊行された『〔新編〕日本女性文学全集』（菁柿堂）の第三巻には、美知代の二作品（「ある女の手紙」「一銭銅貨」）が収録され、吉川豊子と守本祐子による解説・年譜も付された。

とはいえ、美知代文学を評価するための課題は山積している。論者は、「蒲団」の強大なフィルターを通して眺められつづけてきた美知代を等身大の女性作家として読み直すことを目標に、岡田（永代）美知代研究を開始した。前稿で、美知代の生と創作を簡単にたどるとともに、研究の現状と課題についてまとめたのでご参照いただきたいが[1]、研究の大前提として、未解明な箇所が多い美知代の年譜を埋めることと、著作リストを作成することの二点が重要である。

研究の基礎として著作リストは必須であるが、これまでに全体を

カバーするものはなかった。本稿では、論者が調査により作成した美知代の著作リストを稿末に掲げるとともに、その概要を述べたい。この著作リストによって、美知代研究のみならず、明治・大正期の女性職業作家の成立過程の研究や少女小説研究にも寄与し、田山花袋研究に対しても何らかの貢献ができることを期待している。

一　著作リストに関して

稿末の表1は岡田（永代）美知代の著作リストで、彼女の著作がこれだけまとまって明らかになるのは初めてである。いまだ不十分なリストで、今後の調査の進展により新たな作品が加わっていくであろうが、とりあえずの中間報告として公表したい。併せて表2に、掲載メディア（新聞雑誌）別の作品数と発表期間も付した。

著作リスト作成のための調査は、上下歴史文化資料館編の『岡田（永代）美知代作品集』①②③所収作品の書誌事項を探索することから出発した。美知代は作品掲載誌から自作の部分だけを切り取り、約八〇作品分を保存していた。美知代没後は、晩年の美知代から英語を教わるなど親しい関係にあった原博巳が切り抜きを保管していたが、上下歴史文化資料館の開館とともに館に寄贈。これをもとに館が私家版として三巻の作品集を作成したのである。ただし作品の現物はあるものの、掲載誌や巻号、発表年月日等が不明なものが多い。論者は、資料館のご厚意により作品集を拝見させていただき、書誌事項の調査を進めた。まだ不明なものも残るが、大半の作品の出所が解明できた。著作リスト（表1）の「上下町」欄の数字は、その『岡田（永代）美知代作品集』の収録巻数である。

著作リスト作成にあたっては、表1の末尾に付した文献も参照した。ただし、文献に記載されていても実際の雑誌で確認できなかったものはリストから省いている。

これら参考文献に記載されていない作品は、美知代作品掲載の可能性がある雑誌新聞をしらみつぶしに調査することにより、今回新たに判明したものである。目次と本文の署名が異なるものなどは美知代作であるかどうかを適宜判断した。現物未確認ではあっても掲載が確実な作品はリストに加えている。初期の雑誌投稿期には、本文は掲載されず、講評に美知代の名前と作品タイトルが記されて投稿の事実が知られるものがあるが、本リストではこれらも作品としてカウントし、備考欄に「＊本文ナシ（講評のみ）」と注記した。同じく備考欄の「△」印は、掲載誌の目次に作品タイトル・執筆者名のないものである。また、リスト登載にあたり、旧字体は新字体に改めた。

作業の結果、判明した美知代作品数は、以下の通りである（二〇一一年九月三〇日現在）。

Ⅰ　著書……六冊

1　単著……五冊（うち、翻訳二冊）

2　共著……一冊

Ⅱ　新聞雑誌掲載作品……二〇五作品
（掲載誌・掲載時期未詳のもの、現物未見のものを含む）
Ⅲ　生前未発表原稿……一〇作品

これまで知られていたよりも、かなり多くの作品を残していたことがわかる。これらのうち、主要雑誌に掲載されたと考えられる美知代の作品は以下である。

（1）「早稲田文学」（第二次）の彙報欄より
・五九号（明43・10）……ある女の手紙（美知代）『スバル』
・六〇号（明43・11）……里子（美知代）『スバル』
・六六号（明44・5）……清のぐるり（美知代）『ホトトギス』
・九六号（大2・11）……冷たい顔（美知代）『婦人評論』
・一〇〇号（大3・3）……郷里のをんな（美知代）『婦人評論』
・一〇四号（大3・7）……蛙鳴く声（美知代）『新小説』
・一〇八号（大3・11）……ドウデエの盲皇帝（美知代）『たかね』
・一〇九号（大4・10）……「蒲団」「縁」及私（美知代）『新潮』
・一二二号（大5・1）……秋立つ頃（美知代）『希望』

（2）『現代日本文学大年表』（現代日本文学全集別巻、改造社、一九三一年）より
・明39・10　文藝倶楽部　森の黄昏　岡田美知代
・明39・12　文藝倶楽部　姑ごゝろ　岡田美知代
・明41・4　文章世界　老嬢　岡田美知代
・明43・9　スバル　ある女の手紙　永代美知代
・明43・10　スバル　里子　永代美知代
・明43・12　ホトトギス　岡澤の家　永代美知代
・大2・10　婦人評論　冷たい顔　永代美知代
・大3・2　婦人評論　郷里のをんな　永代美知代
・大3・6　新小説　蛙鳴く声　永代美知代
・大4・12　希望　秋立つ頃　永代美知代

いずれも「スバル」「ホトトギス」「婦人評論」「新小説」「希望」が取り上げられており、当時評価の高かった雑誌が知られるとともに[2]、明治末から大正四年ごろまでの美知代が、自然主義の女性作家として一定の評価を得ている状況が見て取れる。

つづいて表2の説明に移りたい。こちらは、美知代の執筆動向を一望できるように、新聞雑誌別に掲載作品数と執筆期間をまとめたものである。投稿雑誌への投稿が中心だった習作期から、一定の評価ある雑誌に作品が掲載されるようになり、知名度の高まりと平行して少女・児童・婦人雑誌への執筆量が増加していく。最終的にはほぼ少女小説の書き手となるが、一九二四年を最後に執筆は途絶える。長い中断期に、美知代は永代静雄と離婚して渡米、太平洋戦争の激化を前に帰国し、晩年を広島県庄原市で過ごした。戦後には「蒲

団」のモデルとしての手記を二つ発表しただけであった[3]。

二　著作の時期区分

つづいて、表1のリストをもとに、美知代の執筆時期を、A習作期、B「岡田美知代」としての執筆期、C「永代美知代」としての執筆期、の三期に分け、それぞれの特徴を概括したい。

A　習作期……神戸女学院在学中の一九〇二年（明治三五）から、一九〇四年（明治三七）花袋門下に入り上京、永代静雄との関係が発覚して上下町に帰郷するまでの一九〇六年（明治三九）一月まで。

この時期は、和歌や叙事文を中心に雑誌投稿を行なっている。上京前は和歌、上京後は叙事文などの短文が中心で、主な投稿誌は「中学世界」[4]。ほかに「女子文壇」にも投稿している[5]。複数の筆名を使い、目次に名前が載ることはない。作品本文も掲載されず、講評で触れられて投稿の事実が知られるのみの号もある。ここからは、字数や投稿数などに厳格な制限のある雑誌に和歌や短文を投稿し続けて、採用の有無に一喜一憂する習作時代の美知代の姿がうかがえる。

それにしても、花袋に何度も手紙で懇願して弟子入りし、文章修行のために上京したにしては、この時期の作品は少ない。美知代の生前未発表原稿には、上京前後にも筆名を使って「新声」や「文庫」に投稿し掲載された経験をもつことを語るが、まだそれらしき作品は発見できていない。戦後になっての回想で本人の記憶が朧化していた可能性もあるが、今後も調査を継続していく。

B「岡田美知代」としての執筆期……一九〇六年（明治三九）一月の帰郷から、一九〇八年（明治四一）の再上京と永代との同居まで。

永代静雄との恋愛発覚により上下町に帰郷。二年余りの帰郷の間の一九〇七年（明治四〇）九月、花袋が「蒲団」を発表、美知代の身辺に激震が走った。一九〇八年四月に再上京して白山御殿町の兄・実磨の家に住むが、妊娠。兄の家を出て九十九里に隠れ住み、年末に静雄と友人・中山三郎の三人で牛込区原町で同居を始める。若い美知代にとって、まさに激動の三年間である。

習作期に引き続き投稿雑誌への短篇小説掲載が中心であるが、田山花袋主筆で創刊された「文章世界」をはじめ、「新声」「文庫」「実業之横浜」、さらに「新潮」「文藝倶楽部」「家庭雑誌」など、発表誌も広がり、目次にも名前が載るようになっている。

今回の調査では、従来の研究では触れられることのない美知代作品もいつくか発掘できた。とくに「文庫」三四巻五号掲載の「その月その日」（明治四〇年六月）は静雄への思いや自身の身辺の変化が私小説風にほのめかされており、注目される。「新声」一六編五号掲載の「御おとづれ」（同年五月）など一連の美知代作品の投稿雑誌掲載が、花袋の「蒲団」執筆・発表の呼び水となった可能性もある。従来、「蒲団」や「縁」に描かれた恋愛事件を美知代の側から私小説的に描いた作品としては、次期「永代美知代」時代に書か

れた「ある女の手紙」や「里子」が取り上げられることが多かった。しかしながら、「蒲団」刊行後の「侮辱」（「女子文壇」四年六号、明治四一年四月）などを含めて、「岡田美知代」時代の作品の中ですでに、自らの身の上に起きた事件を、短文の縛りをかいくぐり小説化しようと試みているのである。このような「蒲団」発表前後の美知代作品と「蒲団」との相互関係については、別稿でさらに検討していきたい。

C「永代美知代」としての執筆期……一九〇九年（明治四二）三月の長女出産から、一九二六年（大正一五）の渡米まで。筆名を「永代美知代」に改めている。

明治四二年一月、形式的に田山家の養女となって永代静雄と結婚するも、同年一一月には永代と別れ、長女・千鶴子を連れて田山家に戻る。翌年、千鶴子を花袋の妻・りさの兄・太田玉茗の養女に出すが、その後、妹弟子の水野仙子と同居していた家を出奔し、永代と共に暮らす。明治四四年三月には長男・太刀男を出産、同年六月に養女に出した千鶴子が病死するなど、この期も前半は激動の歳月であった。

その間に、花袋の「縁」が出され、これに反論・対抗する形で「ある女の手紙」（「スバル」明治四三年九月）・「里子」（「スバル」同年一〇月）・「岡澤の家」（「ホトゝギス」同年一二月）などが書かれた。その他、先述した「早稲田文学」彙報欄や『現代日本文学大年表』にとりあげられるような作品群は、明治末から大正四年ごろまでに書かれており、「文章世界」の「現代文士録」欄でも、数少ない女性作家として美知代は取り上げられている。また、「中央公論」二五年一二号（明治四三年一二月）に美知代は「一銭銅貨」を発表しているが、これは「女流作家小説拾篇」の一作であり、「永代美知代」は気鋭の女性作家として遇されていたのである[6]。

このような自然主義作家としての小説執筆と同時に、この時期の最大の特色は、少女小説や児童向けの読物を手がけて量産していることである。長女出産の直後から「少女世界」（博文館）を舞台に書き始められ[7]、大正期に入ると、「家庭パック」「ニコニコ」「少年倶楽部」など掲載媒体も多岐にわたり、さらに、「女の世界」や「淑女画報」などにも軽い読物が書かれ、次第に一般小説は影をひそめる。少女小説や童話ばかりか、「現代少女の新用語」などの流行語や海外事情の紹介、さらに「野菜ばかりの西洋惣菜料理十五種」（「淑女画報」大正三年五月）といった献立記事にいたるまで、現代のフリーライターのごとく、驚くほど柔軟に多様な素材に対応している。こうした美知代の変貌の要因は今後の検討課題だが、出産育児の体験により子どもや女性の生活に関心をもつようになったこと、大正期の児童・少女雑誌の隆盛期で需要があったこと、売文による経済的自立（あるいは家計補助）の必要性といった理由があったのかもしれない。

さらに著書の刊行もこの期になされた。大正六～七年にかけて短

編集一冊と評伝二冊を、大正一二～一三年には二冊の翻訳書と共著一冊を公刊している。なかでも『奴隷トム』（原著はストウ夫人の「アンクルトムスケビン」）と、『愛と真実』（同、ミューラック夫人「ジョン・ハリファックス」）の二冊の翻訳書は大きく新聞広告も出され、特に『奴隷トム』は版を重ねたようである。共著『熱筆』では、美知代は柳川春葉の家庭小説「なさぬ仲」を一三〇枚の梗概に手際よくまとめて解説を付している。大正八年ごろから新聞雑誌に発表される作品が激減しているが、書籍の仕事に傾注していたのであろうか。

一九二五年（大正一四）以降の作品はまだ見つけられていない。大正一三年五月に翻訳書と共著を相次ぎ刊行、九月に「少女世界」に少女小説「誕生日の贈り物」を載せたのを最後に、ぴたりと執筆が中断。一九二六年（大正一五）に永代と離婚して、太刀男を連れて渡米した。帰国したのは、日米開戦前夜の一九四一年（昭和一六）三月であり、アメリカで再婚した花田小太郎と一緒であった。このあたりの詳細な事情は未解明である[8]。

帰国後は、公表されたものとしては「蒲団」のモデルとしての手記を残しているだけであるが、戦後に書かれたと思われる未発表原稿が残されており、これらの翻刻公開が待たれる。

おわりに

以上、本稿では、岡田（永代）美知代の著作リストの中間報告として、各期の特色を簡単に述べた。今後も美知代の著作調査を継続するとともに、今回の調査で明らかになった作品を同時代の文壇・文化事情をふまえつつ読解し、かつ作品検討を女性作家の執筆過程などの同時代状況の解明へと還元させていきたい。

美知代に関する情報や資料をお寄せいただければ幸いである。

付記

本稿は、平成二三年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「広島の女性作家・岡田（永代）美知代に関する総合的研究」による成果の一部である。

美知代の著作リストを作成するにあたり、府中市上下歴史文化資料館と守本祐子氏、原博巳氏から、資料提供・閲覧・教示など多くの援助を賜った。共同研究者の遠藤伸治氏・瀬崎圭二氏からも助言をいただき、本学大学院生の盧氷・井本まどか・板倉大貴の各氏には雑誌調査と複写資料整理の作業補助を担当してもらった。

また、本学図書館をはじめ、広島県立図書館、広島市立中央図書館、府中市立図書館上下分室、広島女学院大学図書館、国立国会図書館、日本近代文学館、大阪府立中央図書館国際児童文学館、お茶の水図書館、東京大学明治新聞雑誌文庫において、資料閲覧やレファレンスの便宜をはかっていただいた。

各位に厚くお礼申し上げます。

注

1　有元伸子「広島の女性作家・岡田（永代）美知代研究（1）―研究の現状と課題―」『内海文化研究紀要』三九、二〇一一年三月

2　雑誌「希望」と「たかね」は、残念ながら未見である。「読売新聞」大正四年一二月一四日の「よみうり抄」には、「▲永代美知代氏は近作秋立つ頃を露西亜人エロシエンコ氏は自作小説「提灯の話」を「希望」新年号に寄せたりと」との記述がある。他に「女学の友」「女子の友」「復習と受験」の美知代作品掲載号も実見できていない。これらの雑誌についてご教示いただけると幸いである。

3　ただし、執筆は続けており、残された生前未発表原稿の多くは、執筆時期未詳ながら、原稿の状況から戦後に書かれたと推定される。

4　資料として、「中学世界」に投稿された和歌を掲げておく。「中学世界」の投稿和歌には、選者が天・地・人・○・●などの序列をつけるが、入選数や順位の記号は号によって異なり、統一されてはいない。また、美知代が弟・三米や母・美那子の名まで借りて投稿しているのは、「中学世界」が「一人一篇」の投稿制限を設けていたためであろう。

・五巻六号（明治三五年五月）

●梅　　備後　　岡田三米

一枝を手折りて行かん岡本の梅の盛りを見ぬ友のため

・五巻七号（明治三五年六月）

○暮春　　備後　　岡田道代

惜しめども春はすげなく更けにけり又逢ふ時の我身やいかに

●ほたる　　備後　　岡田美那子

五月雨の名残の露はかつちりて蛍とぶなり小野の草むら

・五巻一一号（明治三五年九月）

●露　　備後　　巌谷涙子

我庵の荒し垣根のさゝかにの糸にも余る秋の夕露

・六巻二号（明治三六年二月）

○梅　　備後　　岡田紫菫

朧ろ〳〵月のうつれる池の面に汀の梅のはな散りかゝる

・六巻三号（明治三六年三月）

○春の歌　　備後　　岡田涙

音もなく三片四片の花散りて月おぼろなり山の下庵

・六巻五号（明治三六年四月）

●渡良瀬の辺りを思ひて　　神戸　　岡田美知代

毒水の流れ絶へせぬ渡良瀬は春とは名のみ草も萌出ず

・六巻八号（明治三六年六月）

○五月雨　　備後　　岡田紫野

野の寺に友のひつぎを見送りし其夜よすがら五月雨のふる

・七巻九号（明治三七年七月）

◎　　牛込　　岡田美知代

いたで負ひし武士一人大刀とりて見かへるそらに時鳥なく

[5]「少女界」三巻一一号（明治三七年一一月）の「少女談話会談話」に掲載された「麹町　岡田千代子」の「機智」は美知代が投稿した可能性もある。「岡田千代子」の名は、「少女界」三巻五号（同年五月）の新入会員名簿に見え、住所は「東京麹町区」「土手三番町一六」。当時美知代は、花袋の妻りさの姉・浅井らくの家（麹町区土手三番町二七）に住んでいた。名前と住所の番地が若干異なるために今回の著作リストに入れていないが、「少女界」は当時唯一の少女投稿雑誌で、この時期には山田邦子や服部貞子（水野仙子）も盛んに投稿していた。

[6] 美知代以外の掲載作家は、水野仙子・小金井喜美子・森しげ女・国木田治子・長谷川時雨・岡田八千代・尾島菊子・野上彌生子・小栗籌子。

[7] 美知代が最も多くの作品を掲載し、執筆時期も長期にわたったのは「少女世界」である。美知代の少女時代には少女専門雑誌は「少女界」のみであり、美知代は、「女子文壇」を除き、女性専用雑誌ではなく、「中学世界」や「新声」「文庫」などの一般投稿誌へ、ときに男性名を用いて投稿している。その後、「少女世界」「少女の友」「少女画報」「少女倶楽部」などが続々と創刊されていき、美知代の妹・万寿代は、小学生で「少女世界」に投稿している。

・三巻四号（明治四一年三月）「梅見に行きて　備後国上下町上下小学校生徒　岡田ます代」（学芸室への投稿、甲賞）

・三巻七号（明治四一年五月）「発途の朝　備後国上下町　岡田萬壽代」（学芸室少女会館への投稿、賞外佳作）

美知代は、妹が楽しみに読み投稿した「少女世界」に、作家として作品を発表し続けたことになる。

[8] もともと美知代と静雄の夫婦仲にはかなり波があったようで、大正四年にも離婚騒ぎが起きている。「読売新聞」大正四年三月二九日に、「閨秀作家破鏡の嘆　芸術に生きんとする美知代女史」として二人の離婚を報じる記事が載り、「永代と別れたに就いては、深い事情があるのですが、自分からは何にも申しません」、「芸術に生きたいと想ひます、創作!! これが私の生きる路です」といった美知代の発言を伝えている。一方、ほぼ同時期の雑誌「処女」の口絵写真には、「永代静雄氏と夫人美知代子」のキャプションとともに、息子・太刀男とともに写った夫妻の写真が掲載されている（一一巻三号、大正四年三月）。

「永代静雄氏夫人」の肩書でアンケートに答えるなど、大正期の美知代は、〈『新聞及び新聞記者』主宰兼、小説家・翻訳者でもある永代静雄氏の夫人で、一児の母〉というキャラクターで遇される側面もあったと思われる。

表１　岡田（永代）美知代　著作リスト

	西暦	年　月　日	出版社名／発表雑誌	巻　号	題　　名	発表名	上下町	備　　考
Ⅰ－１　著書（単著）								
1	1917	大正６年11月28日	科外教育叢書刊行会		花ものがたり	永代美知代		短編集
2	1917	大正６年７月31日	科外教育叢書刊行会		ケーザル	永代美知代		
3	1918	大正７年２月25日	科外教育叢書刊行会		世界の三聖	永代美知代		
4	1923	大正12年12月８日	誠文堂		奴隷トム　アンクルトムスケビン	永代美知代		翻訳・ストウ夫人原著
5	1924	大正13年５月21日	誠文堂		愛と真実　ジョン・ハリファックス	永代美知代		翻訳・ミューラック夫人原著
Ⅰ－２　著書（共著）								
1	1924	大正13年５月８日	春洋社	文芸協会編	熱筆　名著選集	永代美知代		全５篇のうち、美知代執筆は「柳川春葉のなさぬ仲」
Ⅱ－１　新聞雑誌掲載作品								
1	1902	明治35年５月10日	中学世界	５巻６号	梅	岡田三米		△和歌
2	1902	明治35年６月１日	中学世界	５巻７号	暮春	岡田道代		△和歌
3	1902	明治35年６月１日	中学世界	５巻７号	ほたる	岡田美那子		△和歌
4	1902	明治35年９月１日	中学世界	５巻11号	露	巌谷涙子		△和歌
5	1903	明治36年１月１日	中学世界	６巻１号	小使	岩谷敏雄		△抒情文
6	1903	明治36年２月10日	中学世界	６巻２号	梅	岡田紫堇		△和歌
7	1903	明治36年３月１日	中学世界	６巻３号	春の歌	岡田涙		△和歌
8	1903	明治36年４月10日	中学世界	６巻５号	渡良瀬の辺りを思ひて	岡田美知代		△和歌
9	1903	明治36年６月20日	中学世界	６巻８号	五月雨	岡田紫野		△和歌
10	1904	明治37年７月10日	中学世界	７巻９号	（無題）いたで負ひし～	岡田美知代		△和歌
11	1904	明治37年７月10日	中学世界	７巻９号	友達	岡田美知代		△叙事文　＊本文ナシ（講評に作品名と名前のみ）
12	1904	明治37年12月10日	中学世界	16巻16号	雑種子	岡田刈萱		△叙事文　＊本文ナシ（講評のみ）
13	1904	明治37年12月10日	中学世界	16巻16号	この死	岡田刈萱		△抒情文　＊本文ナシ（講評のみ）
14	1905	明治38年２月１日	女子文壇	１巻２号	溝萩	岡田刈萱		△「麹町区土手三番町」
15	1905	明治38年２月１日	女子文壇	１巻２号	蝴蝶の賦	岡田刈萱		△新体詩
16	1905	明治38年３月10日	中学世界	８巻３号	白羽箭	岡田美千代		△叙事文＊本文ナシ（講評のみ）
17	1905	明治38年５月10日	中学世界	８巻６号	わが運命	岡田美知代		△
18	1906	明治39年３月15日	文章世界	１巻１号	戦死長家	栞女史		△　懸賞小説
19	1906	明治39年４月１日	新声	14編４号	雪	美知代		
20	1906	明治39年６月１日	新声	14編６号	長女	岡田美知代		
21	1906	明治39年７月15日	文庫	32巻１号	お須磨	美知代		
22	1906	明治39年８月25日	新潮	５巻２号	文から	美知代		
23	1906	明治39年９月１日	新声	15編３号	下賀茂の森	美知代		
24	1906	明治39年９月25日	実業之横浜	３巻２号	祝辞	美知代		△
25	1906	明治39年９月25日	実業之横浜	３巻２号	屁の色	美知代		△
26	1906	明治39年９月25日	実業之横浜	３巻２号	梅屋の二階	（署名なし）		△
27	1906	明治39年10月１日	文藝倶楽部	12巻13号	森の黄昏	美知代		目次は「岡田美知代」。内容は「下賀茂の森」に同じ
28	1906	明治39年10月25日	実業之横浜	３巻３号	梅屋の二階	美知代		△

29	1906	明治39年11月25日	実業之横浜	３巻４号	梅屋の二階	美知代		△
30	1906	明治39年12月１日	文藝倶楽部	12巻16号	姑ごゝろ	岡田美知代		
31	1906	明治39年12月15日	新潮	５巻６号	里居	美知代		目次は「美千代」
32	1907	明治40年１月１日	新声	16編１号	家庭	美知代		
33	1907	明治40年１月10日	実業之横浜	３巻６号	不孝児	美知代		△
34	1907	明治40年２月10日	実業之横浜	３巻７号	不孝児	美知代		△
35	1907	明治40年２月25日	実業之横浜	３巻８号	狼の権三	美知代		△
36	1907	明治40年３月１日	新声	16編３号	籠行燈	美知代		
37	1907	明治40年４月15日	文章世界	２巻５号	でこ市	岡田美知代		△＊本文ナシ（講評のみ）
38	1907	明治40年４月１日	新声	16編４号	わか草　処女の日記より	岡田美知代		目次は「わか草」
39	1907	明治40年５月１日	新声	16編５号	御おとづれ	美知代		
40	1907	明治40年５月20日	新潮	６巻５号	《想苑》狼の権（翻訳小説）ツルゲーネフ	岡田美知代		目次は「狼の権　岡田美知代」
41	1907	明治40年５月25日	実業之横浜	３巻12号	閑窓漫筆	美知代		目次は「岡田美知代」
42	1907	明治40年５月30日	実業之横浜	４巻１号	耶蘇校長	岡田美知代		
43	1907	明治40年６月15日	文庫	34巻４号	その月その日	岡田美知代		
44	1907	明治40年６月15日	文章世界	２巻７号	一本榎	岡田美知代		目次は「岡田美千代」
45	1907	明治40年７月１日	新声	17編１号	亀さ	岡田美知代		
46	1907	明治40年７月15日	文章世界	２巻８号	いとこ	岡田美知代		目次は「岡田美千代」
47	1907	明治40年10月１日	新声	17編４号	土手三番町	岡田美知代子		
48	1907	明治40年10月15日	新潮	７巻４号	『蒲団』について	横山よし子		本文作者名の前に「蒲団のヒロイン」と小書き。目次は「蒲団について」
49	1907	明治40年10月15日	実業之横浜	４巻11号	夢現	岡田美知代		
50	1908	明治41年２月１日	文章世界	３巻２号	紋附	岡田美知代		田山花袋選「会話」地賞
51	1908	明治41年４月15日	女子文壇	４年６号	侮辱	岡田美知代		天賞
52	1908	明治41年４月15日	文章世界	３巻５号	日記の内	岡田美知代		△文叢・佳作
53	1908	明治41年４月15日	文章世界	３巻５号	老嬢	岡田美知代		
54	1908	明治41年10月15日	女子文壇	４年15号	父子	岡田美知代		人賞
55	1909	明治42年１月１日	家庭雑誌	２巻１号	御厩堀	岡田美知代		目次は「小説 お厩堀」
56	1909	明治42年２月１日	家庭雑誌	２巻２号	ふたり	美知代		目次は「小説 ふたり」
57	1909	明治42年５月15日	女子文壇	５年７号	火事	永代美知代		
58	1909	明治42年７月１日	少女世界	４巻９号	まあちやんの御看病	美知代		目次は「まあちやん」
59	1910	明治43年９月１日	スバル	２年９号	ある女の手紙	永代美知代	1	
60	1910	明治43年10月１日	スバル	２年10号	里子	永代美知代	1	
61	1910	明治43年12月１日	中央公論	25年12号	一銭銅貨	永代美知代	1	「女流作家小説拾篇」の内
62	1910	明治43年12月１日	ホトゝギス	14巻４号	岡澤の家	永代美知代	1	
63	1911	明治44年２月１日	少女世界	６巻３号	貰つた妹	美知代		
64	1911	明治44年３月５日	少女の友	４巻４号	苦の後	永代美知代		目次は「少女小説　苦の後」
65	1911	明治44年４月１日	ホトゝギス	14巻８号	清のぐるり	永代美知代		
66	1912	明治45年１月１日	少女世界	７巻１号	お年玉	永代美知代	3	
67	1912	明治45年２月１日	少女世界	７巻３号	花枝さんの雪兎	美知代	3	目次は「永代美知代」
68	1912	明治45年４月１日	少女世界	７巻５号	姉様の指環	永代美知代		
69	1912	明治45年７月１日	少女世界	７巻９号	暗い叔母さん	永代美知代		目次は「暗いをばさん」
70	1912	大正元年９月１日	家庭パック	１巻５号	虫干	永代美知代		
71	1912	大正元年９月１日	少女世界	７巻12号	帰校前	永代美知代		
72	1912	大正元年11月１日	少女世界	７巻15号	赤い柿	永代美知代		目次は「少女小品 赤い柿」
73	1912	大正元年12月１日	少女世界	７巻16号	罰金ごつこ	永代美知代		

74	1912	大正元年12月１日	家庭パック	１巻11号	でべちゃんと赤ん坊	永代美知代		
75	1913	大正２年１月１日	少女世界	８巻１号	日本文学講義　落窪物語	永代美知代	2	目次は「おちくぼ物語」
76	1913	大正２年２月１日	少女世界	８巻３号	日本文学講義　落窪物語（下）	永代美知代	2	目次は「おちくぼ物語」
77	1913	大正２年３月１日	少女世界	８巻４号	英国の子供小説　オリヴァー・ツイスト 一	永代美知代		目次は「英国の子供小説」
78	1913	大正２年３月15日	婦人評論	２巻６号	小説　洪水の後	永代美知代	2	
79	1913	大正２年４月１日	少女画報	２年５号	英文のお手紙	永代美知代	3	目次は「少女小説　英文のお手紙」
80	1913	大正２年４月１日	少女世界	８巻５号	英国の子供小説　オリバー・ツイスト 二	永代美知代	2	目次は「オリバーツイスト」
81	1913	大正２年５月１日	少女世界	８巻６号	英国の子供小説　オリバー・ツ井スト（第三）	永代美知代	2	目次は「オリバー・ツキスト」
82	1913	大正２年６月１日	少女世界	８巻７号	英国の子供小説　オリバー・ツ井スト（第四）	永代美知代	2	目次は「オリバー、ツ井スト」
83	1913	大正２年６月１日	少女画報	２年８号	少女小説　郷里	永代美知代	3	目次は、永代みちよ「少女小説 郷里へ」
84	1913	大正２年６月１日	婦人評論	２巻11号	小説　同窓の人々	永代美知代	3	目次は「永代美千代」
85	1913	大正２年７月１日	少女世界	８巻８号	英国の子供小説　オリバア・ツ井スト（五）	永代美知代	2	目次は「オリバア・ツイスト」
86	1913	大正２年８月１日	少女画報	２年10号	少女小説　サマー、ハウス	永代美知代	3	
87	1913	大正２年８月１日	婦人評論	２巻15号	小説　縁談	永代美知代	1	大５『女子の友』に同一作品
88	1913	大正２年９月１日	少女世界	８巻10号	福富草子	永代美知代	2	目次は「福富草子の話」
89	1913	大正２年９月15日	婦人評論	２巻18号	小説　冷い顔	永代美知代	2	目次は「永代美千代」
90	1913	大正２年10月10日	少女世界	８巻12号	国なまり	永代美知代	1	目次は「お国なまり」
91	1913	大正２年10月10日	少女画報	２年13号	少女小説　窓の下	永代美知代	3	
92	1913	大正２年11月15日	婦人評論	２巻22号	小説　出戻りさん	永代美知代	2	
93	1913	大正２年12月１日	少女世界	８巻14号	その日その夜	永代美知代	3	
94	1914	大正３年１月１日	少女世界	９巻１号	この頃の少女の使ふ新しい言葉	永代美知代		目次は「少女の新用語」
95	1914	大正３年２月１日	少女世界	９巻２号	現代少女の新用語	（署名なし）		目次は、永代美知代「少女の新用語」
96	1914	大正３年２月１日	婦人評論	３巻３号	小説　郷里のをんな	永代美知代	1	
97	1914	大正３年２月１日	ニコニコ	37	新カーテン、レクチュアー	永代美知代		
98	1914	大正３年３月１日	ニコニコ	38	英仏女優人気競べ	永代美知代		
99	1914	大正３年３月１日	少女世界	９巻３号	現代少女の新用語	（署名なし）		目次は「少女新用語」
100	1914	大正３年３月１日	少女世界	９巻３号	少女小説　生みの母	永代美知代	3	
101	1914	大正３年４月１日	少女世界	９巻４号	少女小説　生みの母（下）	永代美知代		目次は「少女小説 生みの母」
102	1914	大正３年５月１日	淑女画報	３巻５号	野菜ばかりの西洋惣菜料理十五種－（手軽で、経済的で、美味で、誰にでも出来る）	永代美知代		目次は「野菜ばかりの西洋料理十五種」
103	1914	大正３年５月１日	少女世界	９巻５号	現代少女の新用語	永代美知代		目次は「少女の新用語」
104	1914	大正３年６月１日	少女世界	９巻６号	現代少女の新用語	永代美知代		目次は「少女の新用語」
105	1914	大正３年６月１日	淑女画報	３巻７号	短い恋と長い恋の新レコード	永代美知代		
106	1914	大正３年６月１日	新小説	19年６巻	蛙鳴く声	永代美知代	2	本人が「蛙鳴く頃」と修正書込
107	1914	大正３年６月１日	ニコニコ	41	七人目のが理想の夫　四人目の今の夫を離婚の訴訟中	永代美知代		目次は「四人目の今の夫を離婚の訴訟中」
108	1914	大正３年７月１日	ニコニコ	42	富か芸術か $35,000,000か画板か	永代美知代		目次は「富か芸術か $35,000,000乎カンバス乎」
109	1914	大正３年８月１日	少女世界	９巻８号	地獄の御飯のたべられる湯の宿から	永代美知代		目次は「湯の宿より」

110	1914	大正３年９月１日	少女世界	９巻９号	泥棒に一冊の書物を与へた寄宿舎の少女	永代美知代		目次は「泥棒に書物を与へた寄宿生」
111	1914	大正３年９月１日	ニコニコ	44	廃王の恋の日記	永代美知代	2	
112	1914	大正３年９月 or 10月	たかね		ドウデエ盲皇帝	(不明)		未確認、「早稲田文学」第二次、108号、大3.11.1の彙報「新聞雑誌文学一覧」に記載
113	1914	大正３年10月１日	淑女画報	３巻11号	二、賑かなセルビアの結婚＝何事も父母の意志次第で動く青年男女	永代美知代		目次は「セルビアの結婚」
114	1914	大正３年11月１日	少女世界	９巻11号	貧賤の身から発奮して女学校の教師に！	永代美知代		
115	1915	大正４年１月１日	少女世界	10巻１号	十六で表彰された親孝行な子守女	永代美知代		目次は「十六歳で表彰された子守女」
116	1915	大正４年２月１日	ニコニコ	49	莞爾々々的あの家此家	永代みち代	3	
117	1915	大正４年３月１日	少女世界	10巻３号	火炎に包まれゆく野呂さん	永代美知代	3	目次は「火炎に包まれ行く少女」
118	1915	大正４年３月１日	ニコニコ	50	おさつで買収した『女客』	永代美知代	2	
119	1915	大正４年４月１日	少女世界	10巻４号	少女小説 ゆく水	美知代		
120	1915	大正４年５月１日	少女世界	10巻５号	行く水 二	美知代女		目次は「少女小説 ゆく水」
121	1915	大正４年５月１日	ニコニコ	52	不思議な女達	美知代	2	
122	1915	大正４年６月１日	少女世界	10巻６号	行く水 三	美知代女	3	目次は「少女小説 ゆく水」
123	1915	大正４年７月１日	少女世界	10巻７号	行く水（四）	美知代女	3	
124	1915	大正４年８月１日	少女世界	10巻８号	少女小説 ゆく水	永代美知代		
125	1915	大正４年８月１日	ニコニコ	55	廿歳で眼の開た令嬢の初めて見た世界	永代美知代		
126	1915	大正４年９月１日	ニコニコ	56	顔から生れた十億弗	永代美知代		
127	1915	大正４年９月１日	新潮	23巻３号	『蒲団』、『縁』及び私	永代美知代	1	目次は「『蒲団』『縁』及び私」
128	1915	大正４年10月１日	女の世界	１巻６号	小説 二人の家	永代美知代	1	
129	1915	大正４年10月15日	女の世界	１巻７号	平氏の恋と源氏の恋	永代美知代		定期増刊 恋物語
130	1915	大正４年12月	希望		秋立つころ	永代美知代	1	未確認
131	1916	大正５年１月	希望		秋立つ頃	永代美知代	1	未確認、「前号の続き」
132	1916	大正５年１月	女子の友		縁談			未確認、大２『婦人評論』にも掲載
133	1916	大正５年１月１日	女の世界	２巻１号	当世浮世風呂女湯の巻	永代美知代		
134	1916	大正５年１月１日	ニコニコ	60	今様閨語	永代美知代	3	
135	1916	大正５年２月１日	ニコニコ	61	妻より未婚のクラスメートへ	永代美知代		
136	1916	大正５年２月１日	少女画報	５年２号	姉より妹に－東京の印象－	永代美知代	3	
137	1916	大正５年３月１日	少女世界	11巻３号	梅日和	永代美知代		目次は「少女小説 梅日和」
138	1916	大正５年５月26日	婦女新聞	836	愛の欠乏は婦人をヒステリイにする	永代みち代		目次は「愛の欠乏とヒステリイ」
139	1916	大正５年６月１日	幼年世界	６巻６号	チビ太郎の冒険	永代美知代		目次は「永代美智代 チビ太郎（お伽噺）」
140	1916	大正５年６月16日	婦女新聞	839	短篇小説 母一人子一人	永代美知代		(上)
141	1916	大正５年６月23日	婦女新聞	840	短篇小説 母一人子一人	永代美知代		(下)
142	1916	大正５年７月１日	少女世界	11巻７号	長い指 短い指	永代美知代		目次は「少女小説 長い指 短い指」
143	1916	大正５年７月１日	ニコニコ	66	夏と家庭	永代美知代	2	
144	1916	大正５年７月14日	婦女新聞	843	短編小説 電報	永代美知代		(上)
145	1916	大正５年７月21日	婦女新聞	844	短編小説 電報	永代美知代		(下)
146	1916	大正５年８月11日	婦女新聞	847	少女小説 帰省の日	永代美知代		目次は「帰省の日(少女小説)」
147	1916	大正５年９月１日	少女世界	11巻９号	私の最も感動した事 仲間はずれの少女	永代美知代		目次は「私の最も感動したこと」

148	1916	大正５年10月１日	少女世界	11巻10号	歴史物語　信行の侍女（上）	永代美知代	2	
149	1916	大正５年10月20日	婦女新聞	857	小説　秋晴の日（上）	永代美知代		△
150	1916	大正５年10月27日	婦女新聞	858	小説　秋晴の日（下）	永代美知代		目次は「秋晴れの日（小説）」
151	1916	大正５年11月１日	少女世界	11巻11号	歴史物語　信行の侍女（下）	永代美知代		
152	1916	大正５年12月１日	少年倶楽部	３巻12号	大岡裁判　皮剥獄門	永代美知	2	
153	1917	大正６年３月１日	ニコニコ	74	仲人になつて	永代美知代		
154	1917	大正６年３月１日	少女世界	12巻３号	雛祭を待ちつゝ	永代美知代		
155	1917	大正６年４月１日	ニコニコ	75	素人書画会を観る	永代美知代	2	目次は「素人書画会を見る」
156	1917	大正６年６月１日	ニコニコ	77	愛と鼻	永代美知代	2	
157	1917	大正６年９月７日	婦女新聞	903	小品　理想の美人	永代美千代		上
158	1917	大正６年９月14日	婦女新聞	904	小品　理想の美人	永代美知代		下、目次は「理想の美人」
159	1917	大正６年11月１日	少女世界	12巻12号	冒険奇談　少女島（一）	永代美知代		目次は「冒険小説 少女島」
160	1917	大正６年12月１日	少女世界	12巻13号	冒険奇談　少女島（二）	永代美知代		目次は「冒険奇談 少女島」
161	1918	大正７年１月１日	少女世界	13巻１号	冒険奇談　少女島（三）	永代美知代	3	目次は「冒険奇談 少女島」
162	1918	大正７年２月１日	少女世界	13巻２号	冒険奇談　少女島（四）	永代美知代	3	目次は「冒険奇談 少女島」
163	1918	大正７年３月１日	少女世界	13巻３号	冒険奇談　少女島（五）	永代美知代		目次は「冒険奇談 少女島」
164	1918	大正７年10月１日	少女世界	13巻10号	山の物語　角のある人　一	永代美知代		目次は「角のある人」
165	1918	大正７年11月１日	少女世界	13巻11号	山の物語　角のある人　二	永代美知代		
166	1918	大正７年12月１日	少女世界	13巻12号	山の物語　角のある人（三）	永代美知代	3	目次は「角のある人」
167	1919	大正８年９月１日	夢の世界	２巻９号	蛇物語	永代美知代	2	
168	1919	大正８年11月１日	ニコニコ	101	寄せ切れ買ひに……	永代美知代	2	
169	1920	大正９年２月１日	少女世界	15巻２号	美枝ちやんの眼	永代美知代		
170	1921	大正10年６月１日	女の世界	７巻６号	良人が若し不品行をしたなら……？	永代美知代		男女品行問題号、肩書は「新聞及新聞記者主幹永代静雄氏夫人」
171	1921	大正10年６月１日	少女世界	16巻６号	（二）クリームパン	永代美知代		「たのしい遠足の日」の総題で、三人の分担執筆
172	1921	大正10年８月１日	女の世界	７巻８号	愛無き者に依つて醸せる悲劇	永代美知代		浜田栄子問題真相号、目次は「永代美智代」
173	1922	大正11年４月１日	令女界	１巻１号	童話　緋桃の精	美知代		
174	1922	大正11年５月１日	令女界	１巻２号	少女小説　孤独	美知代		
175	1923	大正12年４月１日	婦人公論	８年４号	われらは飢ゑてゐる（今日我等女性は一番何を痛切に要求するか）	永代美知代		
176	1924	大正13年５月１日	女性	５巻５号	棄権	永代美知代		「総選挙に誰れを選ぶか？」の解答者24名の一人
177	1924	大正13年７月	復習と受験		童話　裁判の鐘	永代美知代	3	未確認
178	1924	大正13年９月１日	少女世界	19巻９号	少女小説　誕生日の贈り物	永代美知代	3	目次は「少女物語　誕生日の贈物」
179	1958	昭和33年７月１日	婦人朝日	13巻７号	手記　花袋の「蒲団」と私	永代美知代		『日本文学研究資料叢書 自然主義』に再録
180	1958	昭和33年10月１日	みどり	１巻５号	手記　私は「蒲団」のモデルだった	永代美知代		（學燈社）
Ⅱ－２　新聞雑誌掲載作品（掲載誌・時期未詳）								
1			女学の友		東京で（一）	永代美知代	1	女学文壇
2			女学の友		東京で（二）	永代美知代	1	
3			女学の友		東京で（三）	永代美知代	1	
4			女学の友		東京で（四）	永代美知代	1	
5			女学の友		東京で（五）	永代美知代	1	
6			女学の友		東京で（六）	永代美知代	1	

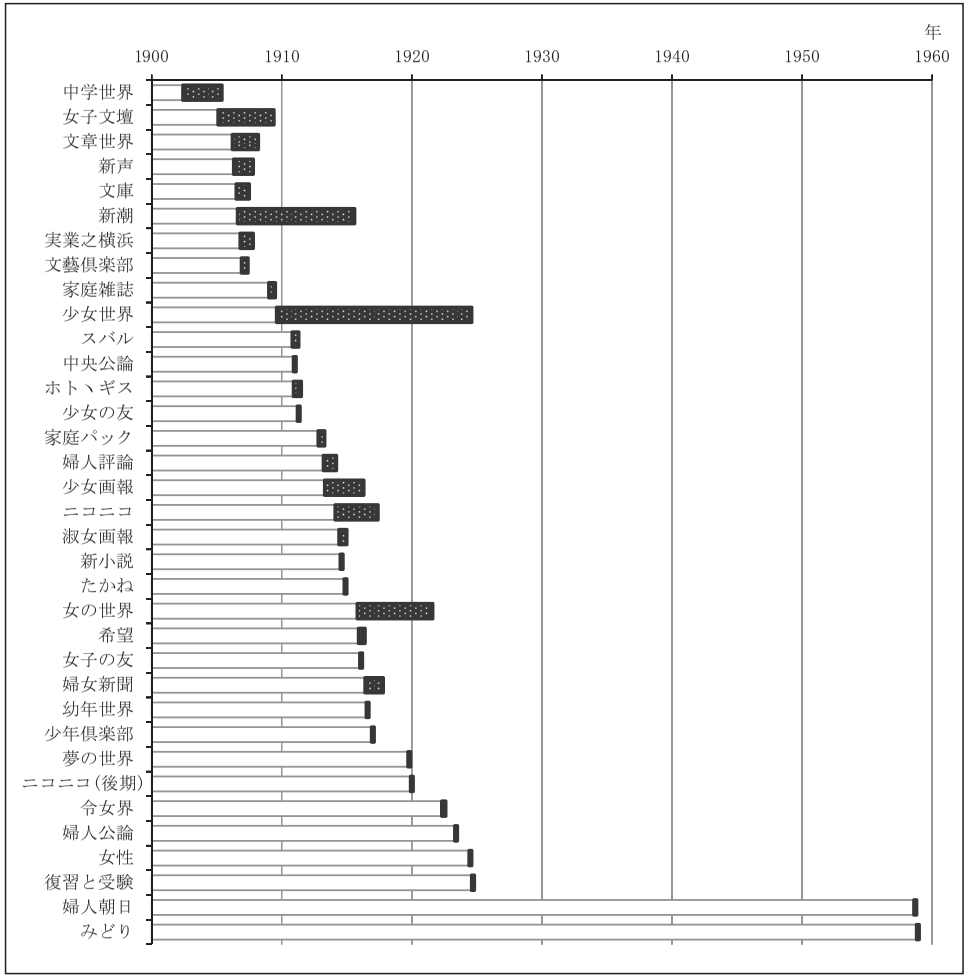
7			女学の友		東京で（七）	永代美知代	1	
8			女学の友		東京で（八）	永代美知代	1	
9			女学の友		東京で（九）	永代美知代	1	
10			女学の友		東京で（十）	永代美知代	1	
11			女学の友		三人姉妹（一）	永代美知子	1	
12			女学の友		三人姉妹（二）	永代美知代	1	
13			女学の友		三人姉妹（三）	永代美知代	1	
14			女学の友		三人姉妹（四）	永代美知代	1	
15			女学の友		三人姉妹（五）	永代美知代	1	
16			女学の友		三人姉妹（六）	永代美知代	1	
17			女学の友		三人姉妹（七）	永代美知代	1	
18			女学の友		三人姉妹（八）	永代美知代	1	
19			女学の友		三人姉妹（九）	永代美知代	1	
20				４号	少女小説　大火の後	永代美知代	3	
21					アルフォンス・ドウデー	永代美知代	2	
22					少女スケッチ	永代美知代	2	
23					怪訝なローレンの瞳	永代美知代	3	前号「春の小人」の続き
24					家庭童話　青い鳥の巣	永代美智子	3	
25					三人の家			
Ⅲ　生前未発表原稿（執筆時期未詳）								
1		明治40年？			小夜子			未発表、花袋記念館蔵
2					女学生の恋物語	30枚		宮内俊介翻刻『花袋記念館研究紀要』12
3		昭和35年？			云い得ぬ秘密	25枚		翻刻　①宮内俊介『花袋記念館研究紀要』10　②原博巳「岡田美知代の素顔」
4					猫の児同様	25枚		
5					デッカンショ	100枚		
6					国木田独歩のお信さん	50枚		
7					瑞穂とその周辺	43枚		
8					愛憎	50枚		
9					野獣	20枚		「一銭銅貨」(「中央公論」明43.12）の改作
10					嫁姑	20枚		

(注)
(１) 旧字体は新字体に改めた。
(２)「上下町」欄は、上下歴史文化資料館編『岡田(永代)美知代作品集』①～③に掲載された作品で、数字は掲載巻。
(３)「備考」欄……「△」は、目次に作品名・作家名が掲載されていない作品。
「＊本文ナシ（講評のみ)」は、投稿雑誌に投稿した事実のみが知られるもの。

(参考文献)
・上下歴史文化資料館編『岡田(永代)美知代作品集』①②③（私家版）
・守本祐子「岡田美知代投稿作品」「岡田美知代の作品」(私家版)
・小林一郎「年譜篇」『田山花袋研究－年譜・索引篇』桜楓社、1984年
・『田山花袋記念館研究叢書第二巻『蒲団』をめぐる書簡集』館林市、1993年
・原博巳「岡田美知代の素顔－田山花袋「蒲団」のモデル」『梶葉』Ⅵ、1998年７月
・原博巳「第７章第二節　晩年を庄原で過ごした女流文学者岡田美知代」『庄原市の歴史　通史編』庄原市、2005年
・大西小生『「アリス物語」「黒姫物語」とその周辺』ネガ！スタジオ、2007年
・宇田川昭子「〔資料ノート〕岡田美知代の知られざる同人活動」『花袋研究学会々誌』26、2008年３月
・小谷野敦「岡田美知代と花袋「蒲団」について」『日本研究』38、2008年９月
・吉川豊子「永代美知代」・守本祐子「略年譜」『〔新編〕日本女性文学全集　第三巻』菁柿堂、2011年

表２　岡田(永代)美知代　新聞雑誌別作品数・執筆期間

新聞雑誌	出版社	掲載本数	初掲載年月	最終掲載年月
中学世界	博文館	14	1902/5	1905/5
女子文壇	女子文壇社	5	1905/2	1909/5
文章世界	博文館	7	1906/3	1908/4
新声	新声社	9	1906/4	1907/10
文庫	内外出版協会	2	1906/7	1907/6
新潮	新潮社	5	1906/8	1915/9
実業之横浜	実業之横浜社	11	1906/9	1907/10
文藝倶楽部	博文館	2	1906/10	1906/12
家庭雑誌	家庭雑誌社	2	1909/1	1909/2
少女世界	博文館	53	1909/7	1924/9
スバル	昴発行所	2	1910/9	1910/10
中央公論	反省社	1	1910/12	1910/12
ホトヽギス	ほとヽぎす発行所	2	1910/12	1911/4
少女の友	実業之日本社	1	1911/3	1911/3
家庭パック	楽天社	2	1912/9	1912/12
婦人評論	婦人評論社	6	1913/3	1914/2
少女画報	東京社	5	1913/4	1916/2
ニコニコ	ニコニコ倶楽部	16	1914/2	1917/6
淑女画報	博文館	3	1914/5	1914/10
新小説	春陽堂	1	1914/6	1914/6
たかね		1	1914/9	1914/10
女の世界	実業之世界社	5	1915/10	1921/8
希望		2	1915/12	1916/1
女子の友	大日本実修女学会	1	1916/1	1916/1
婦女新聞	婦女新聞社	10	1916/5	1917/9
幼年世界	博文館	1	1916/6	1916/6
少年倶楽部	大日本雄弁会講談社	1	1916/12	1916/12
夢の世界	安福通信社	1	1919/9	1919/9
ニコニコ(後期)	安福通信社	1	1919/11	1919/11
令女界	宝文館	2	1922/4	1922/5
婦人公論	中央公論社	1	1923/4	1923/4
女性	プラトン社	1	1924/5	1924/5
復習と受験	南光社	1	1924/7	1924/7
婦人朝日	朝日新聞社	1	1958/7	1958/7
みどり	学燈社	1	1958/10	1958/10
女学の友	早稲田大学出版部	19	?/?	?/?
(掲載誌不明)		6	?/?	?/?



Michiyo NAGAYO (formerly OKADA), a Woman Writer in Hiroshima (2): A Study on Outline of Her Works

Nobuko ARIMOTO

Michiyo NAGAYO (formerly OKADA) is a woman writer from Hiroshima who is known as the model of “Futon”, the novel written by Katai TAYAMA. She wrote novels and many girls’ novels and translated novels during the period from the end of Meiji era to the end of Taisho era, but has not got a fair evaluation because of the strong bias by “Futon”.

In order to revaluate Michiyo without bias, I searched for her works and found 5 individual writings, 1 collective writing, about 200 works in newspapers and magazines, and 10 unpublished manuscripts. In this study I presented the list of Michiyo’s literary works and generalized characteristics of them in each period. There is a great possibility her other works will be found and the number of works will be increased in the future, but this is the first time such a large number of her works are found at once and this will be valuable data to study the birth of woman writers in Meiji and Taisho eras as well as to study Katai TAYAMA.